

う。併し或は其影に人々を退屈させまいとする渡辺校長の心使ひがあったかも知れない。現にスキーの輸入と奨励とは其指金だということも誰も知って居る。

退屈をさせまい小樽の土地を厭と思はせまい此二つには渡辺氏も随分苦心せられた。小樽を悪く言う事は氏の前では禁物である。渡辺校長の家は氏の在任中満十年間一度も上京しなかつたのも東京に憧れる様子を人に見せまい為であったと察する。高商俱樂部は職員を退屈を防ぐ為めに設立されたものと思ふ。最初高商通にあり次に裁判所の傍に移つた。其後も数度移転した何れも頗る粗末なものであるが一部の人達は此処に集まり謡曲の稽古をした。校長渡辺氏も其一人であつたらう。自分も一度は出席した。

裁判所傍の俱樂部は稍広く其階上では歓迎会なども催された。宴会に臨んで自分は職員達に酒豪の多いのに驚いた。酒の上で体裁のよくない事もあつた。

今より回想すれば酒量とて左程の事もなく又当時の小樽としては之位は普通の事であつたらう併し洋行帰りの身には泥酔や管を巻くのを見るに忍びないので式宴会は新に色内の精養軒で洋食でやる事を提議した。

但し其周旋方には飲み党の人々を推す丈けの用意は自分にもあつた其人々の失望と不平とを察し得たからである。精養軒の階段の急なことから室の狭きこと椅子は高く危き藤椅子のみなりし事は知る人ぞ知る。食味も以て察すべし然るに会終りて後に世話方が二次会の催しを唱へた。それは

一人当二合の酒を用意したのが刺つて困るからであつた。洋食に一人前二合宛と云ふので当時の状態はわかるであらう。

初対面とお別れ

渡辺校長との交渉は双方の滑稽なる誤解の裡に始まった。校長が時々之を素つ破抜かれたから其復讐として書いて見るが、実は自分の頭には昔より毛が無かりしもの様に思ふ人達にも参考に供したいのである。

明治四十二年頃当時ベルリン在留中の自分に宛てて面会を求むる書面が渡辺氏より来た。其渡辺氏の名前がどうしても自分にはわからない。全く心当りが無い。日本人俱樂部に問合せると小樽高商の校長になる人だと云ふ。さては早速訪問する事にしたのが十一月三日天長節の日である。先づ髪を綺麗に剃り頭は念入りに分けフロックコートにシルクハット実は大旅館の夜会に出る為めの服装で出掛けた会った其人はと見ると色白く丸味の顔に頭は勿論鼻下まで充分に手入れが行届いて居る所謂満酒たる貴公子だ。之はまいったと思ふた。風流な才人には到底自分はお相手が出来ないと思ふて居つたから其人は苦手だと思ふと多少の警戒心が萌した。

小樽に来てからは小言を言はれぬ様にと思ふて実は身なりまでも注意した。洋行帰りにらしく見せる為。然るに或日突然に呼ばれて校長室に入る。と頸に疎髯を生やし新しくもなき紋付羽織姿の人をそこに発見して始めて安心したものである。豈計らんや渡辺校長の目にはベルリンの其日の自分が大変なお洒落に見へたの

で反対に自分の事を幾分心配せられたとの事である。

実は自分の頭髪は堅くて中々人の様にわけられない。其上に性来フケが多い。之を見兼ねて訪問の丁度前日に大使館の武者小路書記官(今の大使)が自分のペールムを一本贈りフケ取りに使用せよと勧めて呉れた。翌日は即ち祭日でもあるので早速之を使用し頭も鼻下も特に念入りに手入れをしたのが渡辺氏の目に付いたに過ぎない。正体が知れて見れば笑話ものである。程経てから渡辺校長に近づく様になつたのは甚の爲めである。

時としては酔余の対局の相手にもなつたが多くの斤商の黒沼校長との対局の見物であるが其際などの談話を興味を以て聞いた世間に無頓着で無経験の身に頗る有益と思ふたことも度々ある現実に着眼して熟視せよ対策は自ら其裏に存するであらうといふ様な教訓は自分の性格に照らして甚だ有益であつた。

渡辺校長の甚の待ツタは有名なものであるが此待ツタは甚ばかりでない。例へば相談の座で皆んなの意見一致し相談も済んだと思ふ際に待ツタと手を組み思案を重ねられると果して別段の考へが出て来て其結果が事情に適切である。由来自分は速断の癖あり。之を得意の様に思つて居つたが成程思案は一応再応時として三応までも疑らず必要ありと感じた。事物の解決策には一歩進んだものもある事を知つた。之は待ツタの一得と思ふ但論語には季文子三思而後行子聞之日再斯可矣とある。渡辺校長は本校に在職十年の任を

すませて名古屋に転任せらるることになつてから一夕四首の歌を自分に示された。自分は一読直ちに批評してさすがに倫理学者の歌で論理的でありませぬと言つた。感じた俚を率直に述べたに過ぎない。然るに御本人は不満の様子で君は歌の文字を讀んで心持を讀まないと言はれたのが其後も常に氣掛りであつた。

其の歌の三首は忘却したが第一首は

十年間心尽して育てたり行末
なかく和子に幸あれ

といふのである。春風秋雨幾星霜今は十五年の昔になつたが其夕を回想すると此歌が口に出て作者の風貌が眼に浮ぶそうすると作者の所謂心持が段々と深く感得される様に思はれる。

小樽高商の評判の良いことを聞くのは実に嬉しいものである。遠慮をして比較的の評判がよいと云ふことにしても快心の至りである今の彦根高商の矢野校長が文部事務官たりし時に小樽高商は実によき校風を作つたものですねと言はれたことは忘れない。今も自分も同感である。併し此校風の由つて来る所はよく研究して見なければならぬ。例へば小樽の土地柄の如き一見教育に不適当の様に思はれるれど実は案外によき点もあるに相違ない。其他種々の原因は勿論多く存しようが創立当初より引続き十年間に於ける渡辺校長の思慮深き経営画策に感謝すべき点最も多きを信ずる。武蔵野の土蔵、



嗚呼 我等の伴先生

田中 実

嗚呼、悲しい哉。我等小樽高商同窓の恩師と云わんより、寧ろ慈父伴房次郎先生、今や此の世におわさず。昭和三十一年十一月廿日の朝日新聞朝刊は「伴房次郎氏(小樽商大名譽教授、元小樽高商校長)十九日朝老衰のため東京都大田区田園調布二ノ四〇の自宅で死去、八十二才」と報ず。

吾れは思わず、掌を合わせて「先生御在世中は、本當に有難うございました」と伏しおがむ。思えば本年七月の小樽高商創立四十五周年記念祝典には、お元気で飛行機で御渡道、七月六日の晩の北海ホテルに於ける同窓会にも、又翌七日の校内、新講堂に於ける記念祝賀式にもうやうやしく御臨席相成りしものを、遂

に來るべき五十周年記念大典には、先生の御姿を見るを得ざるに到れり。嗚呼悲しい哉。老少不定会者定離の不動律は吾れも亦心得乍ら、もはや先生の温容に接するを得ざるに到れるを思えば、人生の淋しさ、年末の近まるにつけ一入なり。

吾れ小樽高商に於て、先生より法学通論、民法を教わる。学生時代は先生と直接面談したることなかりしを、卒業当日、「御蔭で卒業出来ました。御世話になりました。有難うございました」との卒業御礼と「卒業に際しての学校当局への要望」とを以て先生の官宅を単独、訪れし日が先生と直接会談したる最初の日なり。

此の日「学校当局が、生徒の就職斡旋を成績順にやられるならば学校当局は、試験時に監督官をして今少し嚴重に監視せしめ、カンニングを行わしめない様取計られるべきである」と直訴、直願す。之れに對し、善処すると云われ、尚その言葉を云い残して郷里、鹿兒島へ帰りに行きし吾れへ、先生は御自ら、例のチビ筆で、「卒業式の日、貴君の御來訪は有難かつた。さてあの時の学校当局に對する御要望の件については、至極御尤と思ふ。無論然るべく善後策を講ずる。だが実社会には、点数泥

棒以上の大泥棒が横行し、而かも此の輩が、巾を利かしている。

貴君よ、此の時だ、自ら警戒しなければならぬのは、点数泥棒に對して貴君が憤慨したと同様に、此の時憤慨してはならぬ、悲観してはならぬ。憤慨してもハジマラス。此の場合肝腎なことは、隠忍自重だ、唯おのが誠を尽して進むことだ、それより他はない。自分とても若い自分が世を悲観しキワドイ処まで行つたが(苦しみも喜びも我れ、生くればこそだ、死せる身には苦痛無し)と悟り切つて、今日までやって來た。

此れは私の体験である。何か御参考になるところがあつたら幸せである」といふ意味の、じつに懇切丁寧、慈愛あふるる言葉もて書き送られた。

昭和二十八年五月熱海にて行われた我等、大正十二年第十回卒業の卒業後三十周年記念同期会席上先生は吾れの編集発行せる「小樽高商大正十二年卒業、緑丘同期生現況録」の「各位一言寄書」一頁面のために「手把白玉鞭鞭珠尽擊碎一掠湖」と書き給へり。掠湖とは先生のペンネーム。此の句も禅句。

昨年夏上京、先生を調布の御自邸へ御訪ねしたる時も、先生は「之れだけは、後生大事にして保持したのだから、戦災にも会わせなかつた」として「読書百遍と云うが此の書は何んべん読むかわからぬ」と言つて大版の部厚い禪書を吾れにみせ給へり。此の訪問時に夏のこととて、西瓜を呈上申し上げたり。其後、帰閣して下関から其の時の西瓜持参に就て、調布駅まで途中其の持参の西瓜が電

車にゆられて乗客からブラブラする度に笑われました。先生のお宅までの途中に西瓜屋在りと知りおらば、笑われぬものを……と先生へ書き送りしに先生はすぐ返書して曰く「……西瓜ハ翌日頂戴シマシタ 甚ダ美味デシタガ途中電車ニテ愛興ヲ誘イタコトヲ知ラバ一層喜ンデ味ハエタト思イマス……」先生は斯くの如く何にまれ、教え子の所作を喜び給う人なりき。

而して、葉書一枚に否、葉書の表つまり、名宛面にも半分以下に線を引き此処にもギッシリ、事こまごま教え子、我等にとつては同窓の事などを書いて御自ら喜び賜う人なりき、先生の如く教え子の而かも教知れぬ程多数の教え子の名前を、性格を行状を一々記憶せられたるは、世にも稀なるべし。教え子は此の点、皆驚嘆せり。又先生の如く教え子の多数面々葉書きせられたるは未だ曾てあらざるべし。さればこそ、先生の如く教え子に広く敬慕せられたるは非ざるべし。其の一切の費用、其の一切の世話を以て、曾つての教え子から金婚祝賀会まで挙行して貰へる師は師とて、ともかく、ザラにはあらざるべし。伴先生御人格の反影ノ今や幽明境を異にして先生の顔に見ゆる事も御声ガイに接する事も相叶わず吾等は、真に悲しけれど先生御存命中、我等が受けし御薫陶は我等の脳裡にきざみこまれたれば、よく之れを体し、よく之れを守り、各自持ち合わせの個性を發揮、意義ある生涯をおくらんと志す。

伴先生よ、以て冥せられよ

6577 45-4-1

緑丘

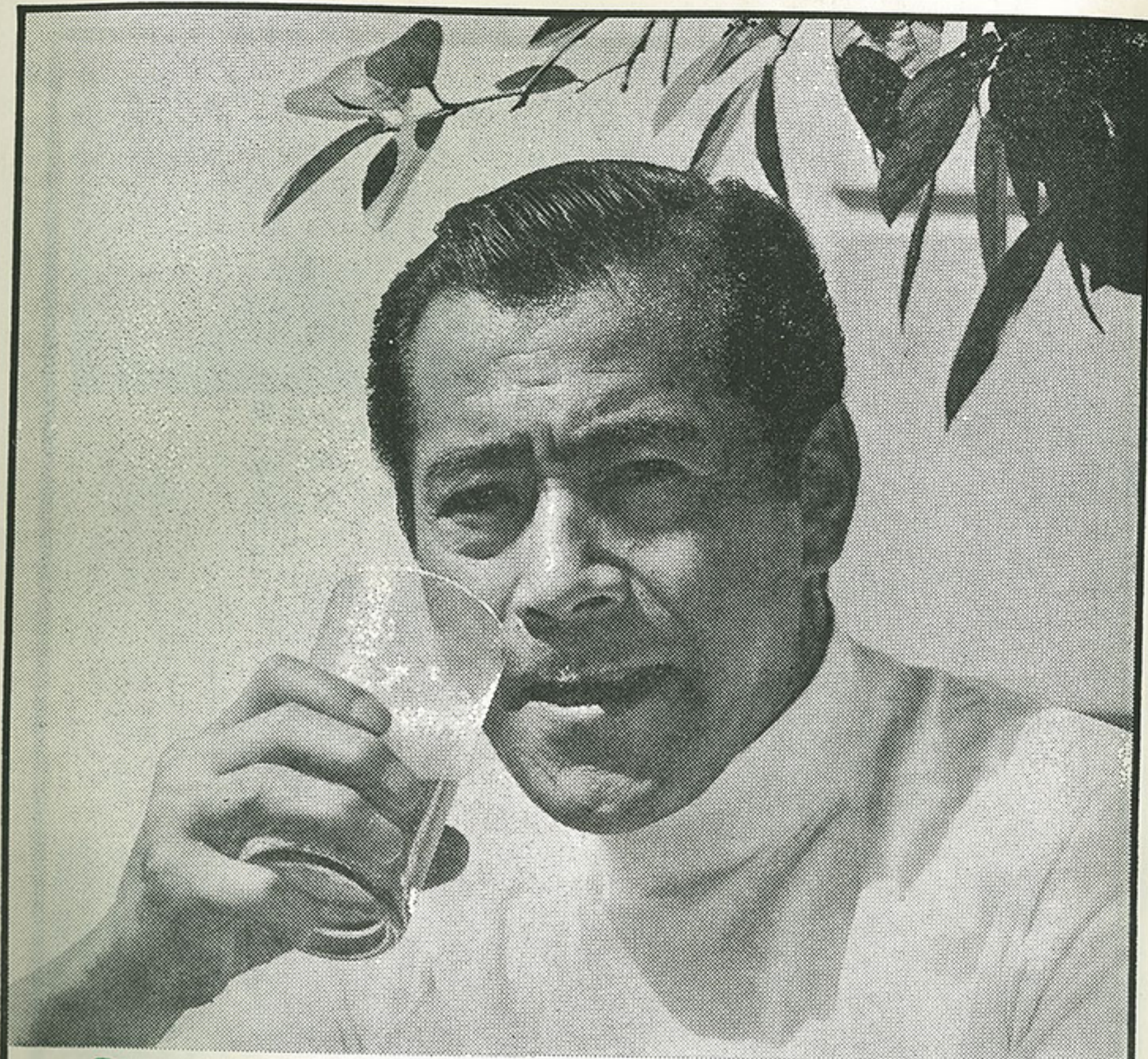
1972 No. 83
46年度 第5号

伴房次郎先生 追憶特集号(下)



図書館南の芝生で
デーゲン教師の授業(1930)
中沢勝平

大 商 會 誌
小 樽 窓



男は黙って ザッポロビール